



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

NEWS LETTER

特集 土を磨く
どろだんごの不思議

vol. 02 | 季刊 冬
2007



榎本新吉 (えのもとしんきち)

1927(昭和2)年東京生まれ。茶室の炉壇を作る数少ない炉壇師。名人左官・山崎一雄氏と出会い終生の師として多くを学ぶ。今、たくさんの方が工房を訪れ、土を通じた交流の輪が広がっている。

粘土と砂と藁スサで芯を作り、乾かしては整え、乾かしては整える。いかにきれいな球形を作るかがどろだんごの命だ。いくつかの工程を経て、仕上げに全国から集まってきた色土を選び、生石灰クリームを混ぜて薄く塗り重ね磨いていく。生石灰クリームは、「現代の大津磨き」で編み出した榎本さんの知恵。磨きにさらなる輝きをもたらすものだ。まさに、



1. どろだんごに色土を塗り磨く。その方法も、試行錯誤の末にフィルムケースへと進化した。
2. 日本各地の土で作られた榎本さんのどろだんご。
3, 4. 「来るものは拒まず」の工房。榎本さんはその知識と技を気さくに教える。

「どろだんご見せると、みんなひっかかるんだよ。にやっと笑う榎本さん。どろだんごは、「左官」を生き残らせるための、職人の詩りかけた静かなメッセージなのかもしれない。

手のひらに心地よく納まるどろだんご。見飽きない色の妙、なめらかな感触、光らないはずの泥が光る不思議。そしてだんごの向こうに広がる土のふるさとの風景。多くの人がどろだんごに触れ、土の力に魅了された。

榎本さんは思っている。どろだんごを作ることが、土壁の復権につながる。日本の土壁の魅力を多くの人に知ってもらい、若い職人が腕をふるう場が少しでも増えたらと。

生涯一職人として、自分の技術を磨くことに終わりはない。だから、その技と知恵が注ぎ込まれた光るどろだんごも無限の可能性を秘めている。

左官がつくどろだんご 土壁の世界を 光るどろだんごに託して 榎本新吉さん

日本の土を見つけてきた左官職人・榎本新吉さん。五感を研ぎ澄ませて土に触れ、土と遊び、土の魅力を存分に引き出す。そこに、榎本さんの思いがこもった「世界でたった一つ」の光るどろだんごができあがる。



榎本新吉さんがどろだんごに出会ったのは今から6年前のこと。たまたまテレビで見かけた「どろだんご」に、「俺ならもっとうまくできる」と職人魂が揺さぶられ、左官屋のどろだんごづくりが始まった。

榎本さんは、日本の壁を仕上げられるように、どろだんごを作る。「だんごも壁もいい材料をいい加減に混ぜればいいんだよ。70年もの間、土と砂をこね、何をどう混ぜればどんな固さになるかは体が知っている。

左官とは、土から探すもの。袋詰の土で壁をつくるのは納得がいかない。だから榎本さんは高度成長期、自然の泥を使い手間をかける左官壁が追いやられるなか、54歳で左官をなりわいとすることをやめた。それでも、東京千石の榎本さんの工房には教えを請う職人、陶芸作家、多くの人がやってきた。

そうした中で、若き日に見たびかびかに輝く大津磨きの壁を現代によみがえらせようと試行錯誤を繰り返して、10年をかけて「現代の大津磨き」を作りました。

泥に石灰を混ぜた塗り壁仕上げの一つ、大津壁。明治から戦前の日本には、その土地の土の色が活かされた大津壁がその町の風

どろだんごの中には日本の土壁の文化と榎本さんの技が凝縮されている。

「どうやったろうまくできるかいつも解明するんだ。うまく磨けなきゃ、道具を見つければいい、道具を作ればいい。日本のものづくりは何でもそこから始まるのさ」。

生涯一職人として、自分の技術を磨くことに終わりはない。だから、その技と知恵が注ぎ込まれた光るどろだんごも無限の可能性を秘めている。

DORODANGO

[特集] 土を磨く
どろだんごの不思議

人の手で、土が美しい球体になり、磨かれて光輝く。子どもも大人も、なぜか夢中になるどろだんごづくり。ほんの遊びのようなどろだんごが、実は、日本の土壁の世界を表現し、子どもたちに、ものづくりの豊かな時間を与えていく。奥の深いどろだんごの世界。その不思議を通して、土の魅力に迫ります。

CONTENTS

INAXライブラリウム
NEWS LETTER

vol.02 季刊 冬
2007

表紙写真
「光の海」をテーマにした灯りのページェント。450本のキャンドルでどろんこ広場を幻想的に演出し、訪れる人を迎えました。(2007.1.13)

[特集] 土を磨く どろだんごの不思議

02 土壁の世界を 光るどろだんごに託して
榎本新吉さん

04 どろだんごの不思議
土・どろんこ館の「光るどろだんご」教室

06 光る土の秘密
世界最大級をめざした 光るどろ玉
土・どろんこ館の光る壁 イタリア磨きの壁

LIVE REPORT

07 開催報告
第7回ムジカセラミカ クリスマスコンサート in 常滑
ニューイヤーカーコンサート2007
来館者が描いた どろパステルらくがきコンテスト

LIVE SCHEDULE

08 これからの催し

常滑から。

1



INA CLAY WORKS



常滑には、「やきもの散歩道」があります。古い工場や建物を利用したショップやギャラリー、カフェ、陶芸教室などが数多くあります。若き陶芸作家のデビューの場所でもあります。焼き物好きには絶好の散歩道です。休日などには全国各地から多くの人々がそぞろ歩きを楽しみ、常滑を代表する観光スポットとなっています。散歩道の脇には、古い土管や焼酎瓶が積み重ねられ、建物の黒い壁と対照的にレンガ色に光っています。道すがら常滑の歴史を饅舌に語り、興味が尽きません。

古い土管の壁「INA CLAY WORKS」と刻印された土管を見つけてきました。

今から80年ぐらい前、創業前後の土管のようです。そのころの工場の勢いや働く人たちの息吹が聞こえそうな元気な色と艶を、今に残しています。

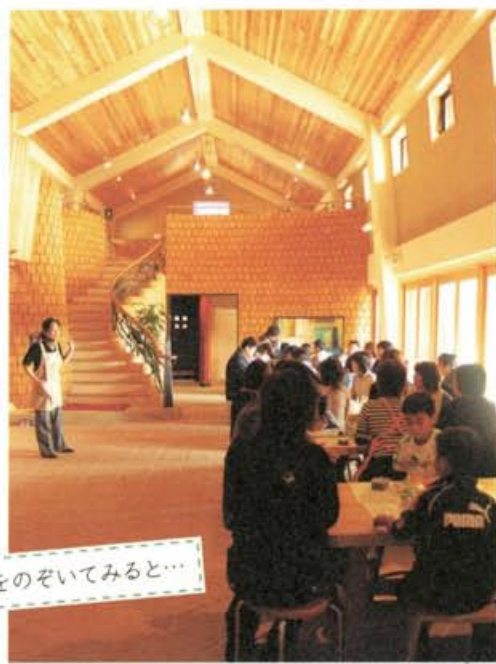
辻孝一郎

INAXライブラリウム編集部

* INAXが生まれ育った常滑のやきものや土に関わる人、風景、できごとなどをスタッフが伝えます。

どろだんごの不思議

土・どろんこ館の「光るどろだんご」教室
大人も子どもも夢になるどろだんごづくり



ある日の「光るどろだんご」教室をのぞいてみると...

1.「これはやきものの土を使ったどろだんごで一す」土・どろんこ館に先生の声が響きわたる。

2. だんごのダネを限りなく美しい球体にするため「のこ歯」を使って削っていく。まずはきれいな玉を作ることがポイント。



これどお？丸い？

美しさ、素材としての多様さ、力強さ。土の魅力と可能性をさまざまな角度で伝えていく土・どろんこ館。土に触れ、土と遊び、「土ってすごい」が体感できる。なかでも人気なのは「光るどろだんごづくり」教室。
このどろだんご教室を充実させるために、スタッフはどろんこ館オープン前から試行錯誤を重ねてきた。土絵作家の三木きよ子先生の「光るどろだんご講座」で夢中で磨く子どもたちに感動し、榎本新吉さんに「教えてやるから作っていきなよ」と手ほどきを受け、さまざまな作り方を参考しながら、土・どろんこ館オリジナルの「光るどろだんご」を編み出した。



土・どろんこ館のどろだんごは、やきものの土を使う。やきもの用の土で作っただんごのダネをきれいな球体にするのが第一歩。手の中にどろだんごのダネを包み込んで、土の感触を確かめてほしい。納得のいくまで丸く削って、ピカピカに磨いてほしい。気持ちを含めてどろだんごに向き合えば、不思議なほど心豊かな時間が流れていく。

3. さらにステンレスのカップを使ってチェックしながら美しい球体に。



きれいな形を作るには姿勢も美しくないとね

4. 色土を凹凸なく薄く塗りのばしていくために、フィルムケースが登場。



赤い色土を塗るよ

5. いよいよ最終工程の「磨き」。大人も子どもも、磨け、磨け。



磨き続けると無心になるから不思議



? なぜ光るのか、どろだんご

光るどろだんごの伝道師
加用文男先生(京都教育大学教授)に聞く。

幼児心理学の研究のため通っていた保育園で、ある日、一つのどろだんごを手渡された加用先生。次第に夢中になって、2年後、ついに「だれでも作れる6段階ステップ」を発見。2000年にはビデオまで制作し、加用先生は、あたかも伝道師のように、光るどろだんごを世に知らしめることとなりました。

—光るどろだんごが人を魅了する理由は？
加用 一つには謎解き、どうしてできるのかを探っていく面白さ。そして、すごいものを作りたいという目標達成感。でもそれだけでは2歳の子どもの夢中になるのを説明できません。自分の手の中でクチャクチャしているうちに、放しがたい愛着が湧いてくる。ちょうど、着古した下着への愛着みたいだね。

—なぜ土のだんごが光るのでしょうか？
加用 光るのは反射光。直反射する光がたくさんあるほどよく光る。表面が平らであれば乱反射しないわけです。粘土の成分を利用して表面皮膜を作り、粒子の面を一定方向に向かせて限りなく「つるんとした平坦な皮膜」にすることが光る秘密です。



光っている表面



光っていない表面(8000倍)

粒子は、薄い六角形の板状

僕は最初、表面を見ようと顕微鏡を買ったけれど、後で地質学の先生に笑われました。可視光線の波長は0.3μ～0.8μですから、数千倍の電子顕微鏡でなければ表面の構造は見えないんです。

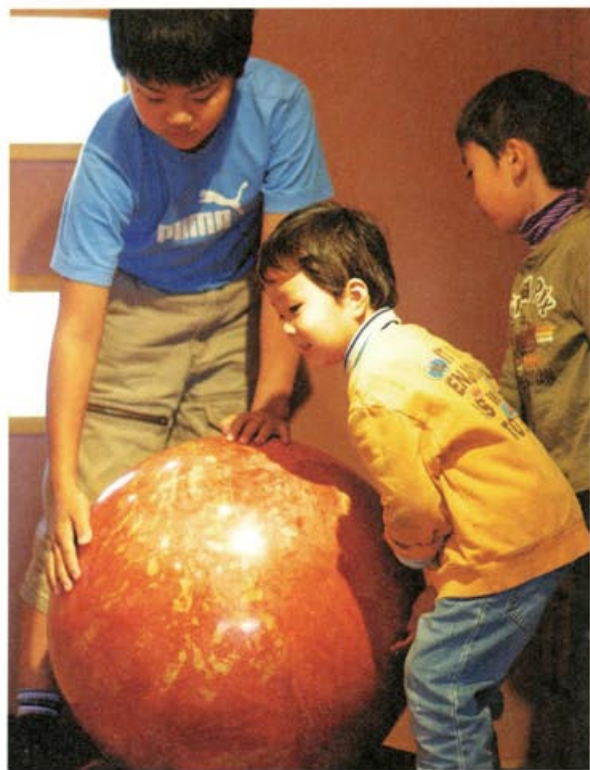
—1μは1万分の1mm。そんな小さな世界なんですね。

6. できあがり。乾燥するまでの間、微妙に表情が変わっていくよ。



光る土の秘密

世界最大級をめざした 光るどろ玉



「プラスチックじゃないね」「光ってるー」。ビタビタ触って感触確かめる。燃えるような赤は常滑伝統の「朱泥土」の色、黄色は普通に常滑にある土の色。

直径54cm、重量40kg。土・どろんこ館に鎮座する巨大などろ玉。世界最大の光るどろだんごを作ろうという夢から生まれた、常滑焼の伝統技術と左官の最高技術のコラボレーションだ。

地元の陶芸家八木孝幸さんが、常滑焼の大物を作る技術「ヨリコづくり」で粘土を積み上げ、芯になる直径50cmの球体を作って素焼。ものづくり大学生の木村敏樹さんと北川原良太さんが、それにまず、土壁用の土、さらにノロ（石灰と粘土）を塗り付けて磨き上げた。

「直径30cmのサンプルを7回作



「ヨリコづくり」とは、1000年前から甕（かめ）や壺を作った手法で、棒状にした粘土を「よる」ように積み上げていく。



制作スタッフ。写真左から八木さん、北川原さん、巨大どろ玉の企画者である土・どろんこ館の磯村司、木村さん。



土・どろんこ館の光る壁 イタリア磨きの壁

土・どろんこ館のトイレに続く空間では、土の壁のまったく違う表情を見ることが出来る。赤と黒の光る壁、イタリアで建築によく用いられる「イタリア磨き」の壁だ。世界中で仕事をしている左官の久住有生さんが、材料から仕上げまで土・どろんこ館に合わせて工夫したオリジナル。鏝（こ）の圧力と摩擦で、表面強度を上げることで光らせた。

よく見ると、ツルツルピカピカの表面の中に、模様が浮かび上がる。砂目の多い石灰でパタインをつけ、その上にサーフィン用のワックスを塗って仕上げているのだ。「材料作りがいちばん難しかった」と語る久住さん。職人の熟練の技とチャレンジ精神を見ている。